解　説

北海道農業研究会・（社）北海道地域農業研究所・共催

# 酪　農　研　究　会

講　　演

# 『酪農の経営問題』

酪農家（中標津町農業協同組合組合長）　三友　盛行

平成７年３月９日・北海道大学農学部会議室
（講演の一部を収録し掲載いたします）

## 酪農への入門！

おはようございます。中標津の三友です。こういう集まりは初めてであります。大学という門も初めて潜りました。いつもと場違いかなと思います。こういうところで一農家が話をする。このことの異常さということを、まず第一番に考えてみたい。異常というか大変不幸なことかなと正直言って思うのですね。何故かというと、僕は基本的に中標津の山奥で酪農にいそしむ、これがいい時代だったと思うのですね。僕に言わせれば、ただあたり前に酪農をやってきた。そこにライトが当たり地域そして道内、またここにそして府県に連れられて行かざるを得ない。引っ張り出されざるを得ない。そういう時代なのかなと思います。そういう時代に、酪農家もまた今日お集まりの皆さんも立ち合わされているということだろうと思います。

今日は、酪農の経営問題が与えられたテーマですから、僕の経営問題あるいは酪農に対する酪農家としての見方についてお話したいと思います。

自己紹介をさせていただきます。僕は昭和二〇年東京の生まれです。中学の時に理科の授業で、東京に住んでいる人間は都会しか知らない。そして人の生き方には、あるいは仕事の中には農業も林業もあるのだということを初めて知りました。

それまでは東京の人間は東京にしか住めない、日本中が東京だという認識でした。そんな時に、地方があり農業があるのだということを教えられまして、ぜひ都会以外で暮らしたいと思った。都会の人間が農業を志すと言うことは、まず農学部に行かなければいけない。それしか思いませんでした。農学部へ行けば、たとえば北大なり畜大なりに行けば農業者になれる。そんなことを志してきましたので進学高校に進みました。それで進学の競争に馴染めないということで止めようということになった。そして、いろいろな仲間の議論の中から、一人だけで、はみ出していく人間がいてもいいのじゃないかという経緯がありました。酒の勢いも手伝いましてみんな手を挙げましたが、最終的に実行したのは僕だけでした。他の友人は最終的には進学してしまいました。

さて、これから農業を志すのだけれど、その前にいろいろな所へ行ってみたいと思い、二年ほどかけて日本一周の無銭旅行に出かけ

## 三友　盛行（みとも　もりゆき）さん

〈経営規模〉面積45ha　成牛40頭
育成牛　10頭　乳量220ｔ

〈主な著作〉
「北海道・根室酪農における規模拡大の問題点と転換の方向」
（『デーリィマン』1993年2月～3月号）「提言　持続的酪農の条件と将来への視点」（『酪農ジャーナル』1994年5月号）
「風土に生かされた酪農への道案内①～②」（『現代農業』1994年5月～95年3月連載）

ました。その時に、北海道のパイロットファームへ行きました。当時、昭和四〇年ですが、その地と東京との落差に非常に驚きもしました。しかしながらそこに暮らしている日々。これほど素晴らしい生き方、日々の過ごし方があるものだろうかと若いこともあって非常に感動しました。ここに住もう…と、決めました。

そこで実習している時に、別に入植地があるということが分かりました。僕は、日本の開拓行政の最後の開拓者です。ですから、開拓者承継資金というものを借りて、第二次構造改善事業というものに乗って入植しました。そして、僕が入植してから日本の北海道における開拓行政は一応収束したということです。ついこの間まで開拓者承継資金の償還金を支払っておりました。

そして、入植の条件は妻帯であるということです。すぐに東京に行って幼なじみの家内を口説きまして、「お前が農家をやりたくないというのであれば、すぐにでも止める」という条件で入植しました。しかしその条件は未だに守っていません。

いま家内は、家で二五頭の搾乳牛を相手に留守番をしています。

## 酪農経営の問題点

入植をして、人並みに借金をして、借金を返すために夢中になって働く。その働いている間に借金をする。気がついた時、昭和五六年には四、五〇〇万円ほどの借金が残っている。というようなことで、そこから今、僕がやっているような酪農が始まる訳です。

### ○成立過程

僕の酪農の経過は、実は日本の、北海道の酪農の歴史とかなりの部分で重なり合うのですね。昭和二九年に酪農振興法・集約地域の指定がありました。そこからが近代酪農の幕開けだと僕は思っています。つづいて三二～三三年に、パイロットファームができる。僕は四三年に入植します。この酪農振興法ができた時に関連して今日お話をしたい最大のポイントは、酪農振興法の精神です。

酪農振興法の精神は「急速な発展を目指す」とはっきりと書いてあるのですね。急速な発展が、実は今日の酪農のいろいろな問題を基本的に作り上げているということです。

この急速な発展をどうやって目指すかというと国費の投入です。もう一つは、農家の立場で言えば「負債」と言うことです。急速な発展をするために、生産力を上げるために、負債をするということです。北海道酪農の原型すなわち個人農家の八～九割は、酪農をすること、あるいは入植をするということは、負債をするということと同義語だということです。

殆どの人が自己資金で酪農をするということはあり得ない。基本的に酪農を始めるということは負債を背負うということなのです。だから、負債を背負うということは悪ではないのですね。善なのです。僕は、ただ夢中になってあくせく働いて、生産を拡大すれば借金が払えると思った。気がついた時には借金が四、五〇〇万円。これが根釧の一つのパターンになる。

だから、未だに負債というものの意味や重さというのはそれほど感じていない。経営上収支を合わせることは重たいですけど、負債を背負った時の意味合いについては、基本的に認識は薄い。この様に負債することについての抵抗感がない。そして、農協から綴りを示され、「一億円だよ」ということになる。

はじめから「一億円の借金をするのだよ」と言われたら、僕は酪農をしなかったと思う。結果として一億円だ。一億円は経営収支の問題、あるいは過剰投資の問題です。

この様に急速な発展をするために、国と個人がこういう形で出発したということ、この経過の中でなお規模拡大をして来ているということです。

昭和四〇～五六年くらいまでの規模拡大（はじめての生産調整の時期まで）と、その後（五六年以降）との拡大とは、全く意味が違います。入植をして殆どの人が四〇～五〇haくらいの土地を持ちますが、全部が草地という訳ではない。昭和五五年くらいまでは機械化へ移行する中で自分の持っている土地を開墾する、草地化する。五〇haに相応しい拡大をする。ここまでの拡大は、適正だと思う。これまでの拡大は農家からみればできるだけ早くやった方がいい。当然、借金で始まっていますから。

### ●ゴールなき拡大

問題は、昭和五五年を過ぎてなおかつ拡大していることに、今日の拡大の問題がある。どうしてなおかつ拡大をするか。昭和五四年の生産調整が一つの転機ですが、この生産調整下で何を行ってきたかというと、一頭あたりの乳量を増やして生産調整を乗り切ろうと

▶三友さんの堆肥

いうことになってきました。と同時に円が強くなって穀物が輸入し易い環境も整ってきた。一頭あたり牛乳をより多く搾るということは、固定費は一定ですから変動費だけが増える。その変動費はおおかた飼料代ですが、乳代が変動費を上回れば生産調整期における一つの生き残りの方法論としては有意義だった。

ところが一頭あたりの乳量を高めていくということも、当然限界があるのですが、その限界をも超えてしまう。いわゆる高泌乳化が始まってしまった。昭和五五年くらいまでの拡大と、それ以降の拡大の区別が、農家も本日この会議室にお集まりのみなさんも、きちんと付いていないのかなと思います。

僕は四、五〇〇万円の借金が溜まってしまった。当時は特別な思い入れはなかったが、いま思えば入植した時に、二つの夢があったのですね。これが大事だと思うのですが…。

一つは燃えるマキを持ちたいということです。良い農家は必ず前の年にきちんとマキを積むことができる。我々のような駆け出しの農家は、生木を切って来てそのまま焼く。生木は非常に効率が悪くて、ジュウジュウいっているうちに何も無くなる。燃やすのも大変だ。農家の昔からの夢は、よく燃えるマキをきちんと一年分蓄えておく、これが一つの大きな夢です。もう一つは、牛に腹一杯エサを食わせたい。これだけです。僕は今もこれだけなんですね。このことが実現すれば、いろいろな部分が整理されて、農家生活の水準も上がってくるということです。

脇道に逸れますけど、石炭と灯油を焚くようになってから農民は成長が止まってしまった。便利ということは人を成長させないわけですから。スイッチを入れてボイラーが燃えるという発想と今の規模拡大は全く同一線上にある。灯油がなくてボイラーの調子が悪いと修理しないで入れ替える。あるいは灯油のないことを嘆くということになってきます。

それと、牛に草を腹一杯やりたい。腹一杯やるとやはり五〇haにふさわしい頭数しか飼えない。どうして腹一杯やれないかというと急速な発展のために草地基盤と牛の頭数が合わなかったのですね。常に、常に、牛を増やしてきましたから。ようやく牛も施設も草地も一つのラインで拡大が終わった。そうして腹一杯やる。腹一杯やる時に、実は化成肥料も配合飼料もそんなにたくさんやらなくてもいいのではないかという気がしてきた。たとえば、一番草に二袋、二番草に一袋というのが一つの教科書ですから教科書通りにやっていた。それを少しづつ減らしていく方向に変えました。

それともう一つ、僕は怠け者ですから、毎年、毎年堆肥を撒くことは大変だということになります。堆肥を三年ほど置く。三年目の春に撒くわけですが、そうすると一年目と二年目の春には堆肥を撒かなくていい。その堆肥を切り返しして行くが、このことが、僕の酪農を一番成長させたとも思うのです。どこまで減らしていくことができるのか。これは大きな興味でした。

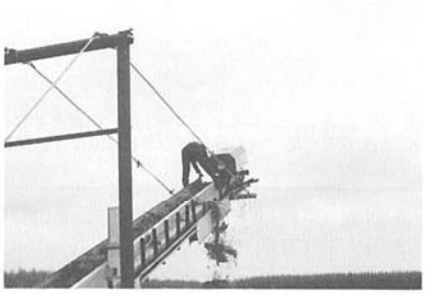
堆肥を作るという作業ですが、今は殆どの農家が堆肥を作ることを放棄しています。今は産業廃棄物ですから、いかに効率よく捨てて来よう、処理をしようということに研究が進んでいるようですけれど。堆肥を作る＝生産に直接結びつかない農作業をするという、効率から見ると無意味な農作業＝そのことをできる農家が大事だと思うのです。生産量に直接結びつかないことを出来る農家、これが大事なのですね。それをやっていると、最初はいい堆肥はなかなか出来ない。いい堆肥を作るためにどうするか。あるいはどういう糞を作るか。そのための餌をやる。そのために何回も何回も切り返しをする。そうすると手に取って頬ずりしてもいいような堆肥が出来てくる。そのことの喜びというのですかね。そして、それを畑に還してくるという作業を黙々と何遍も何遍もやってきました。

その為には良い敷藁を敷く。敷藁を敷けばバンクリーナーのワイパーが壊れてしまいますから、それを一年中エレベーターの最突端に人が立って、敷藁を人手で取って上げる。周りの農家は、敷藁を敷くからそんなことをしなければならないのだと言うのですが、そんな無意味と思えるような農作業を僕は随分して来ました。

## ○拡大の問題点

草地が五〇haになった時点で、木のない農場の哀れさを感じた。僕は入植したときに成るべく木を伐ろうと思っていた。全部草地にしたいと思い湿地も改良しました。ところが落ち着いて立ち止まった時に、木のない農場の虚しさを知りました。

入植以来、国は計画的に防風林を植林しました。その時は、木など植えて仕様がないのになと思っていましたし、木なんて大きくなるのに時間がかかると思っていました。非常に馬鹿にしたことを、今でも覚えています。それが一〇年経って、かなり大きな防風林になってきた姿を見たときに、やはり僕も木を植えようと思った。僕は今、草地の一五%くらい植えていますが、酪農・農業における植林というのも大事なことだと思います。木は、やはり成長が遅い。



◀バンクリーナのワイパー掃除をする三友さん

草地として使った方が効率がいいという時代でしたが、木を植えることができて一〇年経ち、かなり大きな林に育ってきました。

農業の速度は、酪振法の急速な発展とは逆に木の成長くらいの速度がいいのかなと思います。それは物理的な成長ではなく、木は、日々大きくなっていることは分からないが、振り返ると間違いなく大きくなっているのを見ることができる。農業も目に見えるほどには大きくならないのだけれど、振り返って見れば成長している。そういう速度が、農業の発展の速度かなと思います。

農業の規模が大きくなることが発展だとは思わない。今はゴールなき拡大といわれているのですが、実は、五五年のそれぞれ個々の酪農家の草地を基盤とした適正な規模を超えて拡大をしているからゴールがないのであって、酪農家の基本的なゴールは草地に相応しい拡大が終わった昭和五五年くらいの規模、これがゴールだった。

マラソンに譬えるとゴールを超えちゃったからゴールがないのです。ゴールを目指すのだったら戻るしかないのです。

ゴールなき拡大ではなくて、ゴールを越した拡大という方が正しいと思います。

## ●分岐点

このゴールを越して来て昭和五五年から平成二年くらいまで（特に昭和六〇年代）、これは、日本の戦後の酪農にとって最大の良い時代だったと思います。いわゆるゴールドエイジだったと思います。この昭和六〇年代に僕は講演で、「きっと歴史的にみて昭和六〇年代は酪農にとって黄金の時代だ」と言ったのです。そうすると反対・反発を食らいました。「もっと良い時代が来るはずだ。今は、苦しい」と、言うのですね。酪農家は常に苦しい訳ですから。良い時代にどういう経営の充実をしたかということが今の大きなわかれ道になっています。

酪農家は今、何を考えているかというと、ゴールに戻って行こうか、あるいは立ち止まるべきか、あるいは自由化に備えて更なる拡大をするか、この三つの方向をそれぞれが探っている。この平成七年は、大きな分岐点になっていくのだ思います。それは国にとっても各農家にとっても大きな分岐点になっています。多くの農家はそれぞれ息をひそめて、これからどういう方向に行こうかと考えている。しかし、国は新農政の中でスーパーL資金とか認定農家制度を作って、基本的に拡大する方向に持っていこうとしているのです。この流れは基本的に変わらない。

今年はスーパーLが出ているのですが、非常に需要が多いのですね。何故かというと二年に亘る生産調整の中で酪農はいろいろな部分で辛抱しています。そこへ実に巧妙に、というかタイミングよくスーパーLが入ってきました。そしてこれは何にでも使える。認定農家になれば中古のトラクターでも、ちょっとした増改築にも使えます。ところが、当然スーパーLは認定農家制度の中で五カ年計画なり中長期の計画を立てますから、そうすると中長期の計画のなかの中古のトラクターという位置づけになります。農家は二年生産調整したなかで我慢したから、ただ中古のトラクターを買いたいのです。ただそれだけです。

ところが中長期の計画を立てて、そのなかで中古のトラクターという計画を作れば、基本的に規模拡大に引っ張られてしまう。間違いなく引っ張られてしまう。僕はこれが一番怖いなと思います。

新農政は何でもいいと、そして、手挙げ方式に変わりました。手を挙げれば北海道の場合は誰でも認定される。九八％くらい認定される。そして、拡大だけでなく経営を改善すればいいという方向を示して、道のガイドポストでも四〇頭、八〇頭、あるいは法人というメニューを揃えては来ましたが、基本的には拡大という方向になっている。僕は、新農政はちょっと危険かなと思うのです。

生産者から第三期の生産計画をとると、半分の人が、現状維持、縮小、リタイアになっています。四八％くらいが規模拡大というのが現状です。そして、今、立ち止まろうという人が半分くらいいるということで、これは前回の調査で、殆どの人が規模拡大を目指してきたことからみると、非常に様変わりしたことになります。規模拡大を希望しているおおかたの人が、現在の収支が合わないということです。現在の収支が合うおおかたの人が立ち止まろうとしている。ですから新農政は現在の収支が合わない人を拡大させるということになっていく。拡大しても決してコストが下がりませんから、自由化にも太刀打ち出来ないということになります。

今、分岐点に立っているから、あっちこっちから僕みたいな人間がよばれる。そして、彼らが言うのは「どうしようか？これからどうしたらいいか？」です。

新しい二〇〇〇年に向けて、酪農家が立ち向かっていけるのは二つしかない。一つは借金のない酪農家。これは規模に関係ありません。負債がないということが、今後の自由化に対する酪農の強さ。

もう一つは上手に経営ができる人で、規模拡大をしていける人。

(注) この表は、酪農学園大学・吉野宣彦講師（前・当研究所専任研究員）が、三友さんご本人からの聞き取り調査を基に作成したものです。なお、経済データは、組合員勘定報告書を主体に出荷乳量伝票、営農計画書などによります。研究会の資料として提示されたものの一部を転載しました。

| 負債残高（万円） | 農業収入（収入） | うち乳代（万円） | 農業支出（万円） | 農業所得（万円） | 乳代所得（万円） | 元利償還（万円） | 可処分所得（万円） | 所得率（%） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| - | 147 | 128 | 148 | 20 | 1 | 201 | −181 | 13.5 |
| - | 328 | 324 | 242 | 104 | 100 | 18 | 85 | 31.6 |
| - | 448 | 402 | 354 | 123 | 77 | 29 | 94 | 27.4 |
| 696 | 521 | 446 | 327 | 235 | 161 | 55 | 181 | 45.2 |
| - | 718 | 486 | 423 | 324 | 92 | 74 | 250 | 45.1 |
| - | 722 | 678 | 542 | 230 | 187 | 229 | 1 | 31.9 |
| - | 1,136 | 738 | 608 | 632 | 234 | 187 | 446 | 55.6 |
| - | 1,117 | 885 | 719 | 499 | 267 | 197 | 302 | 44.7 |
| 1,272 | 1,225 | 1,036 | 846 | 462 | 273 | 195 | 266 | 37.7 |
| 2,256 | 1,260 | 1,067 | 1,073 | 298 | 104 | 259 | 39 | 23.6 |
| - | 2,010 | 1,342 | 1,193 | 984 | 317 | 371 | 613 | 49.0 |
| - | 2,104 | 1,424 | 1,364 | 922 | 242 | 390 | 532 | 43.8 |
| - | 2,637 | 1,525 | 1,206 | 1,603 | 491 | 400 | 1,203 | 60.8 |
| - | 1,783 | 1,539 | 1,158 | 781 | 537 | 479 | 302 | 438 |
| 2,478 | 2,162 | 1,751 | 1,171 | 1,117 | 706 | 465 | 651 | 51.7 |
| 2,184 | 2,224 | 1,792 | 1,155 | 1,184 | 751 | 789 | 395 | 53.2 |
| 1,552 | 2,027 | 1,700 | 1,097 | 1,012 | 684 | 161 | 851 | 49.9 |
| 1,410 | 2,350 | 1,779 | 1,080 | 1,354 | 783 | 155 | 1,199 | 57.6 |
| - | 2,230 | 1,587 | 1,019 | 1,287 | 644 | 967 | 320 | 57.7 |
| - | 2,125 | 1,457 | 848 | 1,316 | 647 | 153 | 1,163 | 61.9 |
| 603 | 2,692 | 1,709 | 930 | 1,785 | 802 | 155 | 1,630 | 66.3 |
| 869 | 2,350 | 1,669 | 888 | 1,488 | 804 | 149 | 1,339 | 63.3 |
| 767 | 2,088 | 1,710 | 888 | 1,224 | 846 | 157 | 1,066 | 58.6 |

それ以外の人は時代と共に止めていかざるを得ないのかな、と思われます。

# 再建への方向

## ○農業生産力の向上

僕は、昭和五六年から規模を拡大しなかったのですが、資料をみていただきますと、これが僕の経過です。この経過が、酪農の歴史の経過に重なり合うから使いたいのですが、僕の頭の中に入っている話をします。四〇頭搾乳で一六〇t、昭和五六年の経費が一、三〇〇万円くらいだったのですね。平成二〜三年では二二〇t搾って経費が八〇〇万円くらい。

これが問題なんですね。乳量は同じでも経費が下がっていく。最初はいわゆる節約とかで経費が下がってきました。何故かというと経費が下がったのではなくて、僕の農場の生産力が向上した結果だという見方をして欲しい。今にして思えば無駄な経費を差し控えたから八〇〇万円になったのではなくて、八〇〇万円しか掛けなかったとしても二二〇tの牛乳が搾れるようになったということです。では、その生産力の向上は何かというと、やはり土であり、草であり、牛なんですね。それともっと大きなことは、人間の労働の質の向上だと思うのですね。生産力の向上という部分を、今日、本当にしっかりとお話し出来ればいいな、と思って来たのです。

一般の酪農家は生産量の拡大をしてきました。生産量の拡大が、生産力の向上だと思うのですね。生産量の拡大こそが酪農の安定につながると思ってきました。私も思ってきました。ところが生産量の拡大は、一〇〇t経営の人が四〇〇tになれば、少なくとも四倍も経営効率が良くなっていなければならないですね。しかし、ほとんどの人たちの中身は変わらないのですね。

## ●トータルバランス

乳代所得率というのを僕は考えましたが、一般的にいう農業所得率は個体販売プラス乳代から経費を差し引いたものを収入で割り返して出しますが、僕の言う所得率には個体販売を入れません。酪農というものは乳代で生活しようということです。個体販売というの

## 三友盛行さんの酪農経営経過

| 年次 | 総頭数（頭） | うち成牛（頭） | 経営面積（ha） | 出荷乳量（t） | 個体乳量（kg） |
|---|---|---|---|---|---|
| 1969 | 24 | 18 | 40 | 46 | - |
| 1970 | | | | 80 | 4,463 |
| 1971 | | | | - | - |
| 1972 | | | | 94 | - |
| 1973 | | | | 89 | - |
| 1974 | ⇩ | ⇩ | | - | - |
| 1975 | 31 | 21 | | 94 | 4,473 |
| 1976 | | | | 97 | - |
| 1977 | | | | 120 | - |
| 1978 | | | | 116 | - |
| 1979 | | | | - | - |
| 1980 | | | | 154 | - |
| | | | ⇩ | | |
| 1981 | | | 48 | 165 | - |
| 1982 | ⇩ | ⇩ | | 166 | - |
| 1983 | 72 | 38 | | 191 | 5,026 |
| 1984 | | | | 192 | 5,053 |
| 1985 | | | | 190 | 5,000 |
| 1986 | | ⇩ | | 201 | 5,289 |
| 1987 | | 40 | | 196 | 4,900 |
| 1988 | | | | 187 | 4,675 |
| 1989 | | | | 221 | 5,525 |
| 1990 | ⇩ | | | 214 | 5,350 |
| 1991 | 50 | | | 225 | 5,625 |
| 1992 | ⇩ | ⇩ | ⇩ | | |

は価格が高い時もあるし、より多く売れる時もあり、またその逆もあって自分の経営指標の中では非常に捉えずらい性格があります。

大事なことは乳代。乳代から経費を引くのですが、その経費の中から利息分を除くということです。経営にとって負債の負担は利息しかありませんから、経費から利息を除くということは、この人は借金ゼロの農家になるということですね。

仮に借金ゼロの農家にして、乳代所得率が二〇％の人の場合は、借金が無くても結果として負債が増えていきます。だから、借金を棚上げしても五年も経過すれば、また同じように借金が溜まってくることになります。僕が酪農家として思うのは、少なくても三〇％の乳代所得率が欲しいのです。この三〇％というのは通信簿の5点法で3にあたると言うことです。ちなみに五〇％くらいで借金がない状態です。このような人は規模拡大しても構わない。

しかし、二〇％の人が儲からないからという理由で規模拡大しても、自分の牛乳一kg搾る生産構造に問題がある訳ですから、その問題を引きずって規模を拡大すれば、更に足を引っ張られるということです。そのことをキチッとやらないとだめですね。

北海道の酪農家は、おおかたクミカンを使っていますから一〇〇％クミカンを通したということであれば、誰もが自分と他人とを比べることが出来る。このことが大事です。

酪農家の二つの欠点は、①自分以外の経営収支をみることが出来ないこと、②自分以外の搾乳をみることが出来ないことです。基本的に、何処へ行っても、視察に出かけても、搾乳時間には必ず自分の牛舎に帰ります。

自分以外のものが見えないという閉鎖性、非発展性が酪農家を成長させない。そういう状態にありながら情報は洪水のごとく入ってくる。その情報を取捨選択する訓練に欠けています。加えて人間は拡大という指向が強いので「量の拡大」などを伴ってくる情報には乗り易いということで、大事なことが見えない割りには情報が入り過ぎていることが問題とも言えます。

最低でも乳代所得率三〇％はキープしなければなりませんが、それが二〇％にしかならない場合、無理な拡大による欠陥が生じています。粗飼料が足りないから無理な拡大につながっているとも言えます。農業の生産力が不足しているのです。酪農で言う農業生産力は草を牛乳に替える生産力が有るか無いかなのです。

草は当然、土に支えられていますから太陽エネルギーをいかに効率よく土、草に替えていくかということです。

負債というものは経営とは基本的に関係ありません。三〇～四〇％の乳代所得率であっても負債が多すぎて単年度で返済のできない人に対して、はじめて長期・低利の資金があってしかるべきなのです。ところが二〇％の人に対しては、いかに長期・低利の資金を準備しても、それは単なる繰延べに過ぎず一時凌ぎの対症療法であって経営本体を良くすることにはなりません。しかし、農協や酪農団体はいつの時代も長期・低利の資金を望んでいます。

そして自分たちの経営本質に対してきちんとした改善をしない。農協組織も量の拡大による恩恵を受けているし、量の拡大というのは農家に通り易い話であり、国の方針にも合致し全体として乗り易いということです。

量の拡大を支えてきたのは高泌乳です。そしてそれは穀物（配合飼料）多給によってきたという事実です。このこと（配合飼料の多給⇩量の拡大）は、繰り返しますが農業生産力の向上ではありません。「配合飼料で牛乳を搾ること」と「粗飼料で牛乳を搾ること」の違いです。粗飼料をいかに牛乳に替えるかという農場の生産力が三〇％であり四〇％になっているのです。但し、今のような配合飼料と牛乳価格のレベルであれば、うまくコントロールすれば配合多給方式でも経営収支はよくなってくると思います。実際にこのような酪農家が全体の三割くらいはいると思うのです。

しかしそれは、経営としての収支が合っているだけであって、農場における農業収支が合っていることとは別だと思うのです。自分の農場における農業収支が合うような農家を育成してほしいこと、そのことは地域、国の収支も合う訳ですから、二一世紀に一〇〇億を超す人口が出現したときに地球の収支がきちんと合うことが必要だと思います。この収支を合わせるのはたかだか地表の上下一〇㎝の世界です（深くても地下三〇㎝までの世界です）。

ところが我々は、地下数百㎞の鉱物・化石エネルギーを使って収支を合わせているだけなのですね。これは、貯金と同じですからいつの日か枯渇する。我々は次の世代の資源を使って当面の収支を合わせているに過ぎません。農業というのは地表上下一〇㎝の収支をどのように合わすかです。僕のところは、借金がなくて、規模が小さいから儲かるのだと言われますが、そうではなくて、このたかだか一〇㎝の世界の収支が合うということです。

なぜならば、一〇㎝の世界の住民が非常に働き易い環境を作っているということです。それは微生物であり昆虫であり空気です。

配合多給をすると確かに乳量は増えますが、逆にマイナス要素も出てきます。このマイナス要素をいかに小さく抑えるかが技術とも言われています。今の酪農家はこの技術を習得することに一生懸命ですが、これは本当の意味での技術ではない。我々は量の拡大というプラスの部分にだけ目を奪われて、数字に表れないマイナス部分に気づかないでいる為これに収支の足を引っ張られて、変動費だけでなく固定費でもマイナスが生じ、そればかりか牛の疾病も増えてくるということです。

負債が多いから借金が減らない⇩規模拡大する⇩高泌乳をする。その結果、プラスとして間違いなく量を増やします。しかし、乳牛という反芻動物を飼っているということを忘れてしまいました。

我々がなぜ乳牛という反芻動物を飼っているかと言えば、草を牛乳に替える力があるからなのです。

ところが現代の農業は、反芻動物をいかに単胃化するかが研究テーマ化され、鶏に始まって豚、そして肉牛まで来ました。肉牛は最長に飼ってもたかだか二七カ月です。乳牛の単胃化までは出来ないので配合飼料と粗飼料のバランス調整でやっていかざるを得ないということです。僕のところは、草を牛乳に替える効率が高い。この効率を高めるためには行き過ぎた拡大ではなく、適正な規模が条件になるということです。

## ○適正規模

適正規模ということは非常に大事です。根釧で言えば一町で一頭です。それは草としての量、あるいは糞尿を畑に還元するバランスからみて適正ということです。そのときに人の労働が伴うのですが規模拡大の盲点は人の労働の質の低下を招くということです。

労働の質の低下がどのようなことをもたらすか。講演などに出かけて農家をみせてもらう機会がありますが、殆どの農家の畜舎にエサがありません。特に若牛の前にエサがない。何故かと聞きますと「エサはもったいない」と言います。エサは一二〇％やって腹一杯と思ったほうがいいと思います。二割くらい残るようにエサをやって、その残った二割が敷藁になりバンクリーナーに入り堆肥になっていくのです。草は十分仕事をするのですから。特に若牛の前に草がない、あっても食べずらい状態になっているというのは若牛を失業させているのです。

適正規模を超えた酪農家が儲からないのは、自分のところの大事な構成員である牛を失業させているからなのです。働かない従業員

をたくさん抱えていますから当然儲けが出てこないのです。では、若牛はどのような働きをするかと言えば、草を食べて大きくなる仕事をするのです。搾乳牛に十分な粗飼料を与えず牛を失業状態に追いやっていく適正規模を超えた頭数、それが農作業の質を落とし、牛だけでなく、草も、土も、失業状態に追いやっています。

きちんとした対処法をせず化成肥料だけで攻めていく、そして草地更新を単年化する。これは確かに草地としての収量は増えタンパク質の高い草は採れますが、土地を収奪しているに過ぎないと僕は思っています。草地は、なるべく長く使う。そのための維持管理をきちんとすること。今の酪農家は、草地の維持管理の方法を知らない。国を挙げて知らないのです。

酪農は昭和二九年の酪農振興法によって、ある部分では人為的に突如として出来たものです。それを作り上げた流れは耕種農業の流れなのです。だから、草地というものは天地返しをして更新するもので草地更新をしない農家は惰農だということにつながってくるのですが、我々は酪農というものを、歴史的に摑まえてはいないのです。遊牧の民からずっと長い歴史を経てきた酪農ですが、我が国ではコメ文化のような共有の時間を持たず、人工的に突如出来上がったものですから、これについての対処方法が用意されていないのです。

そして、本来ならば自身二〇～三〇年も酪農を続けておればそれに相応しい酪農家になるはずですが、そうした酪農家に育つ暇がないほど毎年、毎年規模拡大を強いられてきた。だから二〇年も三〇年も続けてこようが、酪農業を営むことはできても、酪農家にはなれない。この、酪農家になれないことが、今日、最大の混迷の原因です。

## ●加工業から農業へ

近代酪農は、基本的に加工業に過ぎない。僕が主張しているのは農業としての酪農をやりましょうということです。農業としての酪農をするためには適正規模にしよう。おおかたの人は適正規模を超えていますから結果として縮小ということが出てきます。流行り言葉ではリストラですが縮小なのです。僕は「小さくすることがいいことだ」とは一言も言っていません。「適正規模にしよう」と言っています。

縮小すれば当然乳量が減りますから「負債が返せるのか?」と問われますが、負債が返せないが為に大きくなり過ぎている訳ですから適正規模にして返していくほうがいいかなと僕は思うのです。

酪農は、いろいろなやり方があるように言われるが、実は一つしかないというのが僕の立場です。結局は「たくさん牛乳を搾る」ということに収斂する。そして、たくさん搾る弊害を背中に負って毎日、毎日がんばっているというだけです。僕が言いたいのは、酪農はその一つしかないが、その中でそれぞれが創意工夫をしながらいろいろなやり方があったほうがいい。でも現実は、いろいろなやり方があると言いながら方向性はただ一つ「牛乳をたくさん搾る」です。それは、農政の食料供給の目的だからです。

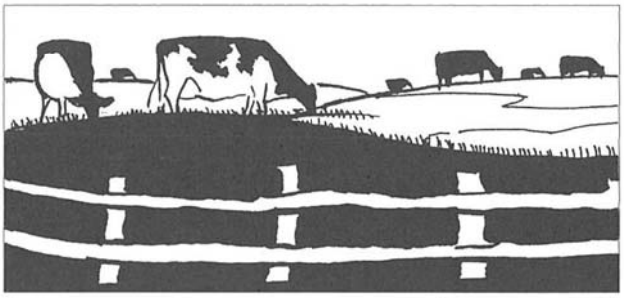
一方、酪農家は決して食料供給を目的にはしていないのです。僕が入植して切実に思ったように、乾いた薪がほしいことや、牛に腹一杯食わせたいこと、そのことで家族を健全に支えていくということだけなのです。決して決して、日本の食料自給率を高めたい等といった大きな世界を我々は持っていないのです。ただひたすら自分の経営、自分の家族を守りたい。そのために酪農をやっているに過ぎないのです。

ところが国は、戦後の食料難を経て食料をいかに自給するかが課題でした。この自給は、国内での自給にはじまり、時代を経て国外から入ってきても構わない、これからは八〇%も九〇%もが国外からのものであっても、国民に食料が供給されるのであればそれなりに農政は機能したということになるのでしょう。

加工業としての牛乳と、酪農としての牛乳を、農政の面からお話しますが、一kgの牛乳の中に二種類入っていると考えますと、一つは殆どを占める加工的牛乳であり、もう一つは草を乳に替える農業としての牛乳です。国の農政はこの加工的な牛乳と農業としての牛乳の比率は問題にしていません。要は一kgの牛乳がより多くあればいいのです。しかし、酪農家の生き方や経営から考えると成るべく農業としての牛乳が多く、加工的部分が少ないほうがいいのです。

換言しますと、国は名目牛乳の量を求めているが、酪農家は草を牛乳に替える実質牛乳の割合を同じ一kgの中でいかに増やしていくかが大事なのです。そのことが農業生産力の向上なのです。農家にとって加工的な部分の生産を増やすことも決して悪いことではありませんがある一定量まで到達した後は、実質部分の比率を高めていくことが酪農の発展だと思います。

僕の地域で、出荷乳量の一番多い人が一、〇〇〇tで一番少ない人が一〇〇tですが、そのどちらの農家も所詮五人くらいの家族を



養うのが精一杯です。とすれば一〇〇tで同じ五人家族を養う方が一、〇〇〇t搾るよりはるかに効率がいい。農業生産力が高いということです。逆に言えば、一、〇〇〇tも搾らなければ家族を養えないということは非常に効率が悪い訳ですが、農政にとっての効率がいいということです。

一方、地域社会にとっては一戸で一、〇〇〇tも搾る農家というのは、一〇〇t搾る農家五〇戸が五戸だけで済むということですから効率が悪いのです。同じ面積に僅か五戸しか養えない地域の貧しさに比べてみた時、五〇戸養える豊かさは歴然としてきます。

牛乳の種類を別の分類をしますと、白、赤、黒の三色です。今は赤字の牛乳が圧倒的に多い。次いでアメリカの土と日本の土を牛乳に変えているだけの黒い牛乳が多い。我々は本来、地域も減らない人も減らさない、土も衰退しない本当に白い牛乳を作るべきです。

僕が心配するのは、加工業というのは量の拡大による弊害だけでなく、それに携わる人々の人生までも奪っていくことです。僕を含めてですが、それは一日一日の加重な労働時間に現れます。

例えば僕は、入植して最初の子供がヨチヨチ歩きの二〜三年は桜を見に行きスズランを狩りに行きましたが、その後一〇年ほどは、桜というものを見たことがありませんでした。桜がいつ咲き、いつ散っていくのか・・。スズランがいつ咲くのかも忘れていました。我が家の前、五㍍幅の道路を越えた防風林へ行けば必ずスズランが咲いているのですが、僕には一〇年以上もその道路を越えるという心の余裕がなかったのです。同じように現在も一〇年、二〇年以上サクラもスズランも見たことがない酪農家が数多いることは確かなことだと思います。

そして加工というのは、配合飼料とか生産資材の量を増やしてもそれが通過する時には、あたかも風が吹いた後に一人一人の体温を奪っていくように、これに参画する人間の、牛の、土、草の体力も奪っていきます。

加工業から農業に戻って、農業生産力を高めていくことが大事だと思います。

## ○自主自営の酪農

将来、日本の酪農をどのように進めていくかですが、基本的に自主自営の農家をつくりあげていくことです。経済的にいえば借金のない農家が一番強いと思います。そして、専業である必要はないと思います。根釧のような専業地帯に大規模経営はあり得ないはずです。仮にそのように思い込んでいる人がいるとすれば、それは大いなる誤解です。何故ならば、専業酪農家はそれに相応しい大きなパックグランドを持っているのです。一〇〇頭以上の牛を飼っている人は、周辺に自分の畑ではなくても一〇〇haくらいの小麦畑を持っているということで初めてその大規模の可能性があります。

現実の専業地帯は、隣も、その隣もみんな酪農専業ですから、自分のところの過剰な糞尿を隣に分けることが出来ないのです。したがって専業地帯は、適正規模（この場合、大、中、小の様々な形態の）酪農家が集約されている姿だと思います。

自由化に備えるためには、量を拡大してコストを下げるのではなく、健全な酪農家をつくってほしいということを望んでいます。

そして、健全な酪農家をつくる最大のことは乳価です。それは価格が幾らでなければならないといったものではなく、酪農家が経営をして、生活できる乳価を国民が理解し支持していくかです。

その地域に住める乳価、それが国際化の中で強い乳価です。国際化というのは、単なる価格の比較ではないと思います。

内なる国際化で言えば、日本の国の中でいかに酪農や農業を認めていくかです。農業を認めていくということは、そこに応分の負担をしていくということです。いいモノは、適正な値段と適正な生産方法と適正な量によって保たれるのですから、それをみんなが応分に分かち合うことのできる国が、豊かな国だと思うのです。

## ●むすびに一言

入植して二六年になりますが、ようやく一人前の農家になれてきたのかなぁと思います。一方で、同期に入植した農家の二男、三男や移転入植してきた農家は段々農家でなくなってきたのかなぁとも思っています。それは、立ち止まるか、立ち止まらないかの違いだと思うのです。僕は今、酪農家として一番大事なことは立ち止まることだと思います。

今までは、常に前へ前へと進んできましたから、立ち止まって、本当に自分の意思でこれから数年先を見極めた上で歩いていこうということです。立ち止まらない限りモノは見えません。そして、本当の農民になっていくことが、自由化にも強い健全な国をつくっていく一助にもなるのかなぁと考えています。